



唐津みなとまちづくり 3つの表情を持つ場所

来るたびに新しい発見がある、
何度も来たくなる場所を目指して

① ENTRANCE

ヤンマー正面のオープンスペースをヤンマー倉庫内に迎えるための前庭と位置づけし、シークエンシャルな見えを意識したデザインをする。具体的に舗装の変化や、ヤンマー倉庫の屋根のアールの意識したウォールでリズム感を出し、奥行観を創出する。また、ウォールにはベンチャインフォメーションサインなど様々な機能を持たせている。



② LIVELY SPACE

賑わいの表情を持たせるため、店舗の窓口を九電側に向かせる。さらに店舗から、カラフルな日差しを出すことで、プロムナードに、賑わいが見えるようなデザインとした。また将来的に九電の敷地側に広大なオープンスペースとなった際、オープンスペース側からのヤンマー倉庫の顔としても機能を持たせている。交通の面では、九電側の通りを、レベル差と舗装によって、歩行者空間と自動車空間の分離を行う。



③ VIEW SPACE

ヤンマー倉庫の海側には、倉庫の無骨さを感じられ、かつ眺望を楽しむスペースとして開口部分にカフェを設置する。唐津は過去2年間に2件の落水死亡事故があり、水際の防災面の機能の向上が望まれているが、海側に対する見えを常に意識させることで、人が常に海を見ている状態にすることで、緊急時の対応を迅速に行う事が出来る。また、海側のプロムナードは歩行者専用にし、水際にフットライトを設けることで、夜間の転落防止を防ぐ。

唐津におけるみなとづくり

唐津は、古くから海を介して交流し「唐の津（唐津港）」を中心として発展してきた「みなとまち」である。しかし、時代の流れの中で、「みなと」に対して背を向けた「まち」になってしまい、「唐津らしさ」は鳴りを潜め、人々の暮らしと水辺は離されてしまった。

現在、行政と市民が議論を重ねる中で、唐津のウォーターフロントは、美しい海に代表される恵まれた自然環境や歴史的資源を生かして、日常的に使ってもらえる場所となること、新たなみなとまちづくりの拠点としての機能が求められている。

そして現在新たなみなとまちづくりの拠点として注目されているのがヤンマー倉庫及びその周辺のスペースである。ヤンマー倉庫は株式会社ヤンマーから市が無償で譲り受けた建物であり、その倉庫はまちから距離をおいた場所にある。その中で非日常的なイベントなどの実施は行われているが、日常的なヤンマーの有効な利用方法の提案を望まれている。ヤンマー倉庫は海に面しており、二階からは周囲の島々や山々、行き交う船を眺められる絶好のロケーションに位置している。

また、ヤンマー倉庫は東港のウォーターフロントの整備の中で、フェリーターミナルと唐津市街地、ヨットハーバーと魚市場にプロムナードを通す構想をしている事から2つの大きな軸の結節点となる重要な場所に位置している。

そこで、私たちはヤンマー倉庫内部を含めた対象地全体を将来、周辺施設を結びつける「HUB」の様な場所になると捉えた。そのために周辺地域と倉庫内外を一体的に捉え、ヤンマー倉庫の3面にそれぞれ異なる表情をまよせことで、訪れる人々が自然と寄りたくなる場所、何度も来たくなる場所を創出する。